

三寒四温を繰り返しながら、3月の声とともに、花の便りが届き始めた今日の佳き日、同窓会長 和合直子様始め、PTA 役員の皆様、そして保護者の皆様のご臨席を賜り、令和7年度卒業証書授与式を挙げていただけますことを、職員一同、大変喜ばしく思います。

ただいま卒業証書を授与いたしました277名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんの高校に入学した令和5年は、コロナ感染症が5類へと移行し、パンデミックからの転換点となった年でした。そこからは類を見ない速さで、潤いを求める様に時代や教育を巡る状況は一気に加速し、生活にも色彩が蘇る中、時代の変化を慌ただしく感じながらも、皆さんには充実した高校3年間という時間を過ごせたのではないかと推察いたします。過去の経験がない中で納得解を探りながら、互いを思いやり、精いっぱい駆け抜ける姿を見せてくれたこと、感慨深い気持ちでいっぱいです。保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。高校卒業という大きな節目を迎えた今日まで、たくさんの愛情を持ってご支援くださいましたこと、また学校活動にご理解ご協力を賜りましたこと、心より感謝いたし、お祝い申し上げます。

時代は、人とモノが繋がり新たな価値観を生むソサエティー5.0 といわれる世の中、果たしてその変化とともに、人としてもここまで成長してきたか、自立できてきたか を、高校3年間の生活においても立ち止まって考えた瞬間があったことと思います。内田樹（たつる）氏の「子どもは判ってくれない」という少々昔の著書の中に、大人になるということについて、考えてみたい、2つの、こんなエッセイがあります。

「誰にも迷惑かけていないんだからほっといてくれ」といって、ドラックをやったり、コンビニの前の道路にへたりこんでいる若者たちがいる。彼らにとって「人に迷惑をかけない」というのが「社会人としての最低ライン」であり、それだけクリアすれば文句ないだろ？というロジックを使う。なるほど、それもいいかもしれない。でも、自分自身に「社会人としての最低ライン」しか要求しない人間は、当然だけれども他人からも「社会人として最低の扱い」しか受けることができない。それをわきまえていたほうが良い。というものです。人間は、表面に疾病を抱える自分の眼球を第三者の視点から見ることはできません。社会へ出る皆さんに、客観的視点の重要性を知る社会人である私からも、今一度思い返してほしいエッセイとして紹介します。

もう一つです、「後悔には二種類がある。【何かをしてしまった後悔】と【何かをしなかった後悔】である。私たちの心を長い時間をかけて酸のように浸食して、私たちを廃人に追い込むような種類の【後悔】とは【何かをしなかった後悔】である。かけがえのない人、かけがえのない出会いを逃したことによる【後悔】、起こらなかった事件についての後悔は、それが起こらなかったがゆえに、私たちの創造を際限なく挑発し続ける」というものです。この2月、ミラノコルティナ冬季オリンピックが開催され、若い選手たちの活躍を見る中で、このエッセイが心をよぎりました。それぞれの選手が、4年に一度のオリンピックという場を目指し、決して何かをしなかったという後悔がないよう、骨折している選手まで、すべてを出し切り闘いで全うしようとする姿勢・・・その激闘の中にも、相手を重んじリスペクトし、勝ち負け関係なく褒めたたえ合う姿からは、人としての生きざまや、あるべき姿を垣間見た気がしました。変化の激しい荒波の社会へと船出する皆さんにとって、忙殺されてしまう豊かな時間や、素晴らしい出会いを逃してしまう「何かをしなかった後悔」という人間らしい苦痛を感じることもあろうかと思いますが、きっと

それは皆さんを成長へと導くものであり、どう生きていくかを追求していくことこそが大人になっていくということなのかもしれません。

オリンピックでの選手たちの姿からあらためて感じたこと、それは「世界は美しい、なのになぜ戦争がなくなるのか」という思いです。2030年のSDGsゴールに掲げられる持続可能な社会を目指し、今の自分に何ができるか、未来へ問い続けた卒業生の皆さんには、「今鳴っている音」とともに、「これから鳴る音」を聞きながら、世界で起こる事実から目をそらさず、温かい手で、世界を変える扉を開け続けていってくださることを、心から願っています。

蟻ヶ崎高校で得たさまざまな経験と、培った情熱を忘れずに、広い世界へと進んでいく姿にエールを送り、卒業生の皆さんの前途に、輝かしい未来が訪れることを祈念し、式辞といたします。

令和8年3月1日

松本蟻ヶ崎高等学校長 鳥谷越 浩子